日本の温泉文化は発展途上

―私たちの欲求が温泉を変える

編集部

知っているようで実は知らない

温泉の成分が付着して石化している湯口からとぽとぽと湯が流れ込む。それを横目にわが身を湯船に浸すと、じわっと体に温泉が染み入る――。何とも言えないひと時である。

日本人は温泉が大好きだといわれる。今回の特集では、温泉が人を癒し、惹きつける根源的な力について、温泉に一家言（いっかげん）もつさまざまな分野の方々にお話を聞き、またいくつかの温泉場を巡って考えた。

「ゆったり浸かって『湯治』」では温泉がもつ効能を、「見て歩いて温泉街」では時代の流れと変遷を、「過去に縛られない未来」では有名な温泉地で若い世代が新しい価値をどうつくろうとしているのかに着目した。

その過程で感じたのは、私たちは温泉について実はあまりよく知らないということ。25度以上ならば温泉、25度未満なら冷鉱泉と呼ぶこともそうだし、温泉の成分は未来永劫同じではなく、今は「塩化物泉」だったとしても塩化物イオンの濃度が薄まれば「単純温泉」に切り替わることもある。温泉には水道水と同じように消毒のために塩素や銀イオンを加えているし、湯の花が発生しにくくなる薬剤を入れるケースもある。

温泉地についても同じである。温泉地の在り様は時代とともに大きく変わっているけれど、それはそのときどきの私たち人間の欲求が色濃く反映された結果なのだ。

その一方で、温泉という存在がもつ神秘性や人びとを惹きつける強い磁力は昔から変わらないし、そこには水も深くかかわっていることを改めて知った。

大衆の欲求を受けとめ変わりつづける温泉地

過去に遡ると、温泉地は人びとが病や傷を癒やす湯治場だった。その後の街道整備、鉄道敷設、自家用車の普及で、温泉地は徐々にレジャー的要素を帯びていく。人が押し寄せるので旅館を大型化し、サービスも新たに考えた。すべては、あれがやりたい、これもしたいという人びとの欲望をかなえるためだった。

バブル経済のころ、温泉地では会合と称する宴会が毎晩盛大に開かれた。温泉はもはやそっちのけで、飲めや歌えの大宴会場と化していた。今では考えにくいこの状況は、わずか30年ほど前のこと。団体旅行から個人旅行へと人びとのニーズが変わり、すたれた温泉地はあるけれど、ちゃんと対応した温泉地もある。

時代によって変化を求められても、過去に縛られて新たに挑めないものが多いこの社会で、温泉地はそのつど挑んでかたちを変え、残ってきた。温泉にはそれだけの力があり、また日本人の温泉に対する深い愛情があったからなのかもしれない。

温泉地を成り立たせる「温泉」と「水」

地中から温かい水＝温泉が湧き出る。これは人間が窺い知ることがで

日本の温泉 略年表

出典：熊野本宮観光協会HP、渋川伊香保温泉観光協会HP、〈カラーシリーズ・日本の自然〉第5巻『日本の火山』、『温泉―自然と文化』（日本温泉協会）、有馬温泉観光協会HP、国立国会図書館HP、城崎温泉観光協会HP、『箱根の歴史と文化 箱根温泉の歴史』（箱根町）、姥子温泉史（現地看板）、中村昭『日本温泉史ノート（その2、その4、その6）』、『歴史と地理（524号、527号）』、草津温泉ポータルサイトHP、道後温泉事務所HP、酸ヶ湯温泉HP、箱根町立郷土資料館、登別温泉HP、黒川温泉観光旅館協同組合HP、佐々木信行『温泉の科学』、『明治・大正家庭史年表』、『昭和・平成家庭史年表（増補版）』

	西暦	和暦	出来事
古墳時代	4世紀頃		熊野の国造、大阿刀足尼が湯の峰温泉を発見
	600以前		二ツ岳の爆裂とともに、伊香保温泉湧出
	538	宣化天皇3	百済の聖明王から日本に初めて仏教が伝えられる（仏教公伝）。552年の説もある
	596	推古天皇4	聖徳太子、「伊豫温湯（いよのゆ）」（道後温泉）へ行幸
	631	舒明天皇3	舒明天皇が有馬温泉に86日間滞在。638年に再訪した記録も
	647	大化3	孝徳天皇、左大臣と右大臣などを引き連れ有馬温泉に82日間滞在
	658	斉明天皇4	斉明天皇や中大兄皇子が「紀温湯（きのゆ）」（白浜温泉）へ温泉行幸。その間に有間皇子が謀反企てるも処刑される
飛鳥時代	720	養老4	道智上人が城崎温泉「まんだら湯」発見
	724	神亀元	高僧・行基が有馬温泉を再興
	733	天平5	現存する風土記で唯一の完本『出雲国風土記』成立。玉造温泉は病気を治癒する「神湯」という記述あり
	738	天平10	白山の僧泰澄が箱根湯本に白山権現を勧請し、温泉が湧き出す
	757	天平宝字元	万葉上人が箱根に入山。山岳信仰の霊場となる
奈良時代	8世紀頃		このころ『万葉集』成立。温泉地にまつわる歌が収録される
	1000頃		清少納言が『枕草子』で3つの温泉を称賛
平安時代	1042	長久3	関白藤原頼通が有馬温泉で湯治
	1097	永長2	有馬温泉が大洪水により壊滅状態に
	1109	天仁元	藤原宗忠の一行が湯の峰温泉を訪ねる
	1128	大治3	白河法皇、有馬温泉へ行幸
	1176	安元2	後白河法皇と建春門院、有馬温泉へ行幸
	1191	建久2	仁西上人が大洪水で壊滅状態だった有馬温泉を再興
	1193	建久4	源頼朝が狩りの途中に草津温泉を訪ねる
鎌倉時代	1280	弘安3	歌人・飛鳥井雅有が自著『春の深山路』で箱根温泉について記述
室町時代	1472	文明4	蓮如上人が草津温泉を訪ねる
	1561	永禄4	武田信玄、川浦温泉の造成進める
	1576	天正4	武田勝頼が真田昌幸に将兵の療養所の造成を命じる（伊香保温泉）
	1590	天正18	豊臣秀吉が有馬温泉で湯治。茶会を催す
安土桃山時代	1597	慶長2	秀吉、前年の慶長伏見地震で被害を受けた有馬温泉の改修工事開始
	1604	慶長9	徳川家康が熱海で湯治
江戸時代	1636	寛永13	松山藩主・松平定行が道後温泉の施設改修に着手
	1684	貞享元	手負いのシカを追って山に入った狩人が「鹿の湯（酸ヶ湯温泉）」を発見
	1685	貞享2	有馬温泉の歴史をつづった文献『有馬山温泉小鑑』刊行
	1695	元禄8	熱海の遊覧と湯治の手引き「豆州熱海湯治道知辺」出版
	1702	元禄15	松尾芭蕉の『奥の細道』刊行。石川県の山中温泉や山形県の湯殿山などで温泉にまつわる句を詠む

きない地球活動によるものであり、だからこそ弘法大師や行基など高僧による開湯伝説という物語が各地に生まれた。燃料が薪や炭しかなく湯を沸かすのが大変だった時代、勝手に湧き出る温泉は貴重だったから地域の財産として大切にされた。

日本は温泉資源に恵まれている。深く掘れば出る、のだ。

1988年（昭和63）から1989年（平成元）にかけて全国3000超の市町村に一律1億円が交付された。これは当時の竹下登内閣による地方創生政策「ふるさと創生事業」で、使い道は自由だったため、温泉掘削に取り組む自治体も多かった。1993年（平成5）に明らかになったのは、1億円を用いて温泉を掘った自治体は252市町村あり、掘削中を除く215市町村が温泉を掘り当てたという事実だ。

ところが、その後のメンテナンス費用が重くのしかかる。平成の大合併後に事業が見直され、閉鎖されたところも多い。特に日帰り入浴のみの温泉にその傾向が強い。付け焼刃では続けられなかったのだろう。

その点、昔からの温泉地は「融通」し合うのでやはり強い。城崎温泉は湧出量に恵まれていないがゆえに、3つの源泉を1カ所に集めて配湯する集中管理方式で運営している。箱根町の塔之澤温泉も旅館同士で融通し合って営業していると聞いた。

一方、温泉地は温泉だけでも成り立たない。「水」が大事なのだ。塔之澤温泉「福住楼」五代目の澤村吉之さんが話してくれたように、温泉宿では熱い源泉を適温にするために加える水、そして宿泊客が飲んだり洗面に使う水、さらに調理用の水も必要だ。また、温泉水を調査・研究している人のなかには、温泉の成分もさることながら、温泉に加える水が重要だと主張する人もいる。

温泉と水。この二つがあるからこそ温泉地が成り立っており、しかも温泉の質に水が大きな影響を及ぼす可能性があるという視点は、今回の取材で学んだことの一つだ。

温泉地を支える さまざまな商い

「湯治場」。この言葉は昭和を生きた人間にとって甘美に響く。古き良き日本をイメージさせるからだ。

ここに2枚の古写真がある。いずれも大正時代から昭和初期のものだ。新潟県の栃尾又温泉で、江戸時代からの湯治文化を継承する自在館からお借りした。

1枚目は中央に三味線を弾きながら唄をうたっている女性がいて、周りの人はそれを見つめている。三味線を弾いているのは「瞽女」だそうだ。瞽女とは江戸時代から昭和初期ごろまで三味線を手に、語りものやはやり唄をうたって旅をして歩いた目の不自由な女性たちのこと。新潟県は瞽女の一大拠点だった。

もう1枚は、地べたに並んだ野菜を湯治客が品定めしている様子を写したもの。かつて湯治客は米やみそ、漬物などを持ち込んで、野菜などは

1新潟県の栃尾又温泉で湯治客に芸を披露する盲目の女性、瞽女（ごぜ）2農業を営む地元の人たちが持ち込んだ野菜を買い求める栃尾又温泉の湯治客。いずれも大正時代から昭和初期の写真
提供：栃尾又温泉 自在館

江戸時代	1713	正徳3	貝原益軒による大衆衛生書『養生訓』成立
	1726	享保11	8代将軍吉宗、熱海から湯樽を運ばせる
	1738	元文3	香川修徳が日本初の温泉医学書『一本堂薬選 続編』を著し、温泉や食養を論じる
	1805	文化2	箱根・小田原両宿場が湯本温泉の宿泊取り締まりを道中奉行に訴えるが、湯本側は「一夜湯治」を主張。事実上公認される
	1809	文化6	柘植叔順が『温泉論』を著し、香川修徳の温泉評価を覆そうとする
	1811	文化8	箱根七湯が湯治場であることを再認識させる『七湯の枝記』成立
	1812頃		温泉番付の一つ「諸国温泉功能鑑」出版。西の大関が有馬温泉、東の大関が草津温泉
	1827	文政10	水戸藩士・小宮山楓軒が川渡温泉、鳴子温泉で湯治を試み「浴陸奥温泉記」を記す
	1837	天保8	宇田川榕菴が日本初の化学書『舎密開宗（せいみかいそう）』の訳述を開始。独自に温泉（鉱泉）の化学分析も行なう
	1845	弘化2	松浦武四郎、登別温泉に立ち寄る
明治時代	1873	明治6	文部省が各地の温泉の効能などを調査
	1880	明治13	ドイツ人医師ベルツが『日本鉱泉論』を著す。西洋医学の見地から鉱泉の効能を解説し、伊香保や熱海など温泉場の整備を提案
	1885	明治18	地図の温泉マークが定められる。当時は湯けむり3本が温泉、湯けむり2本は冷泉と区別された
	1886	明治19	内務省衛生局が『日本鉱泉誌』発行
	1893	明治26	正岡子規が東北（飯坂温泉や作並温泉、湯田温泉峡など）を歩き、のちに『はて知らずの記』として発表
	1895	明治28	城崎町誕生。湯島財産区を設置
	1897	明治30	尾崎紅葉が『金色夜叉』の連載を開始
	1898	明治31	徳冨蘆花が伊香保温泉へ。伊香保を舞台とする『不如帰』を発表
	1905	明治38	カルルス温泉が旭川陸軍予備病院の療養所となる
	1906	明治39	夏目漱石が『坊っちゃん』を発表。作中の温泉は道後温泉とされる
大正時代	1917	大正6	志賀直哉『城の崎にて』を発表
	1922	大正11	若山牧水が長野、群馬、栃木を回り、のちに『みなかみ紀行』として発刊
	1923	大正12	関東大震災発生。多くの温泉地が被害を受ける
	1925	大正14	北但大震災（北但馬地震）で城崎温泉が壊滅的な被害を受ける
昭和時代	1929	昭和4	日本温泉協会設立
	1931	昭和6	国立公園法が施行
			九州大学温泉治療学研究所（現・九州大学病院別府病院）開設
	1934	昭和9	日本温泉気候学会（現・一般社団法人日本温泉気候物理医学会）発足
	1939	昭和14	日本温泉科学学会（現・一般社団法人日本温泉科学会）発足
	戦時中		全国各地の温泉地が疎開先となる
	1948	昭和23	「温泉法」が制定
	1954	昭和29	「国民保養温泉地」第一号として酸ヶ湯（青森）、日光湯元（栃木）、四万（群馬）が指定される
	1961	昭和36	6軒の旅館によって黒川温泉観光旅館協同組合が設立。「露天風呂を集めた温泉街」の取り組み始まる
	1970	昭和45	国鉄が観光キャンペーン「ディスカバージャパン」をスタート。爆発的な人気となり、若い女性をはじめ個人旅行が広がりはじめる
	1971	昭和46	温泉行政が厚生省から環境庁（現・環境省）に移管される
	1975	昭和50	日本秘湯を守る会が発足。1977年に『日本の秘湯』を創刊
	1976	昭和51	日本温泉気候物理医学会が「温泉療法医」を初認定
平成時代	2005	平成17	温泉偽装問題を受けて、温泉法が一部改正。加水、加温、循環装置の使用の有無、入浴剤添加や消毒処理についての表示が義務化
	2006	平成18	12月に観光立国推進基本法が成立。翌年1月施行
	2017	平成29	環境省が有識者会議により現代のライフスタイルに合った温泉地の過ごし方「新・湯治—ONSEN stay」を提案
	2020	令和2	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界的に流行。移動の制限や旅行控えの動きが生じ、日本人一人当たりの国内宿泊旅行の回数は0・7回に（2019年は1・4回）。温泉地も厳しい状況に

露店で買い込んで自炊した。地元の農家にとっては、数少ない現金収入の手段だったに違いない。

このように、温泉場には昔からその地域を支える小さな経済が回っていた。箱根の塔之澤温泉では別の商売で成功した人が温泉宿を始めるケースがあった。黒川温泉の御客屋（おきゃくや）七代目の北里有紀さんは、コロナ禍で客足が途絶えたとき、宿に出入りする地域の業者への支払う金額が一桁減っているのを見て「自分たちは地域経済を支えていたのだ」と責任の重さに愕然としたと話していた。

城崎温泉で旅館の浴衣を着て共同湯（外湯）に浸かり、ほてった体を冷ましながら商店街をぶらぶら歩き、昼はソフトクリームを、夜は地ビールを買い求め、大谿川（おおたにがわ）のほとりのベンチで味わったのは至福の時間だった。それも温泉宿が自分たちだけで客を囲い込まないように内湯を小さく小さくつくり、できるだけ外湯を使うようにそっと促しているからだ。

自分だけ栄えても仕方がない。その精神は、生き馬の目を抜くような今の社会のなかでとても大きな意味をもつのではないか。

温泉がもつ類まれなる力

さてこれからである。湯治場が短期の観光温泉地となり、旅館が大型化して内湯が増え、人びとが外に繰り出さなくなり、周辺の飲食店が地盤沈下した結果、温泉街としての魅力が損なわれる……。その悪循環がようやく断ち切れそうな気配がする。

温泉地が大衆の欲求によって形を変えてくれるのならば、私たちがこれから温泉と温泉地をどう考え、何を望むかが重要になるだろう。

近年、温泉に関しては「源泉かけ流し」がキーワードとなっている。ついつい「ここの温泉、源泉かけ流しなんだって！」と喜んでしまうが、温泉を地域の資源と考えた場合、果たしてそれはよいことなのだろうかと考え込んでしまう。

地球上のあらゆる資源は有限であることを突きつけられている現代、温泉もまた有限であることを忘れてはいけないと思う。実際に泉質が変わってしまって「温泉」の看板を下ろさなければいけなくなった温泉宿もあるし、ある日突然温泉が枯れたケースもあるのだから、過度に使わないように、やたらと掘らないようにしないといけないだろう。

古くから保養や療養に用いられてきた温泉の価値は、現代でも変わらない。温泉のもつ成分や入浴による温熱作用、周辺の自然や環境などが総合的にはたらき、療養効果があることは単なる迷信ではなく、公にも認められていることだ。

人びとを惹きつける力をもった温泉は、地球がもたらす奇跡ともいえる存在なのである。

この国の温泉文化はまだ発展途上

そんな堅苦しいことを抜きにしても、温泉は楽しい。都市近郊に増えている温泉センターも捨てがたい。近所に手足を伸ばしてのびのび入れる温泉があるのは幸せだ。しかし、温泉には転地療養という効果もあるようだから、できれば遠出してみよう。酸ヶ湯温泉のように周辺の山を登ってもいいし、渓流釣りなど趣味を楽しんでもいい。そしてその土地の温泉に浸かる。その間、スマートフォンやパソコンをできるだけ触らないようにすれば、まさに極上のデジタルデトックスだ。

人の少ない温泉地に一人で行く「ソロ温泉」も興味深い。温泉にそっと浸かって自分と向き合うのは、ストレスフルな現代における湯治といえる。人と話したくなったら、湯船で一緒になった人に声をかければいい。地元の人であれば「いいお湯ですね」と泉質にふれてみる。旅人っぽい雰囲気だったら「山登りですか？」とか「どちらから？」だけでいい。話が弾めば楽しいし、弾まなくてもひと時のことだからさほど気にならないだろう。温泉地では他人に深入りしない、少しドライなくらいの関係がちょうどいい。

もともと温泉にはさまざまな楽しみがあったはず。それがここ数十年で「稼ぐ」ために特化したことで、温泉のもつ本来の楽しみを狭めてしまった面があるのかもしれない。かつて文豪が温泉宿に逗留して作品を書いたのは、現代のワーケーションに近い行為だ。

これからの温泉、そして温泉地はさらに多様化するのではないか。集客力に優れた大型ホテルがひしめく温泉地もあれば、泉質を大事にした小さな宿が数軒集まるだけの温泉地もいい。オーベルジュのような料理をセールスポイントにした一軒家的な温泉宿も注目されつつあり、すべての部屋に内湯があるホテルもある。インバウンドに特化した温泉地だってあり得るだろう。外国人観光客は長期滞在が基本なので徐々に日本食に飽き、夕食は外で済ませる傾向が強いと取材で聞いた。とすれば地域全体で取り組めば新たな商機がある。温泉地が「十湯十色」の様相を呈する。そんな未来を夢描く。

地下で起きた現象から湧き出る温泉に浸かり、湯気と熱い湯に愉悦を感じながら、自分は温泉に何を求めているのか、どんな温泉地だったらまた来ようと思うのか、海外から来た人は温泉のどんな点に興味をもつのか——思いを巡らせたい。

日本の温泉文化はまだまだ発展途上。「これから」をつくるのは、今を生きる私たちだ。

浴衣をまとって城崎温泉をそぞろ歩く人びと。温泉文化の未来は私たちが何を望むかにかかっている

【文化をつくる】